

奈良・藤原宮跡

ふじわらきゆう

所在地 奈良県橿原市繩手町

調査期間 第八五次調査 一九九七年（平9）四月

発掘機関 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部

調査担当者 代表 猪熊兼勝

遺跡の種類 宮殿・官衙跡

遺跡の年代 七世紀末～八世紀初期

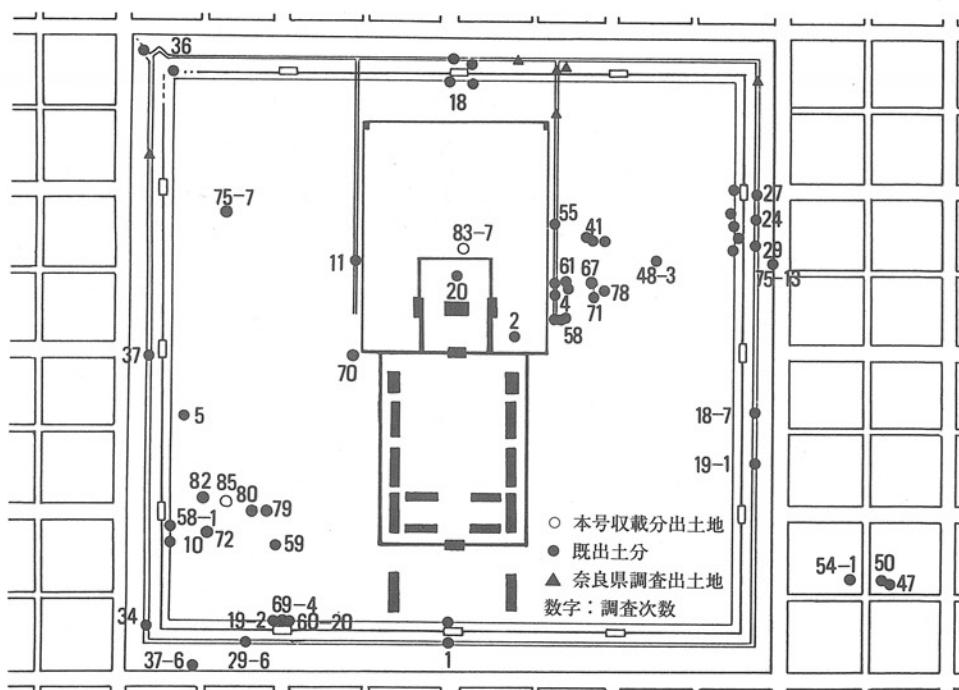
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

この調査は集合住宅建設に伴うものである。調査区は藤原宮西方官衙南地区にあたり、前回報告の第八二次調査区の東に位置する。発掘面積は七〇〇m²である。

遺構面は三面あり、上層は藤原宮期及びそれ以降、中層は弥生、古墳時代、下層は弥生時代である。上層の藤原宮期の遺構は比較的疎らであり、調査の重点は、中層で検出した水田遺構や下層の弥生集落である四分遺跡の解明に置かれ、弥生時代の人骨の残る土壙墓などを確認した。

木簡が出土したのは上層で検出した近世の小土坑SK八八二二からで、一点が出土した。

この他、大極殿院と内裏の境界部分にあたる醍醐池南岸の護岸工



藤原宮木簡等出土地点略図

事に伴う事前調査（第八三一七次調査）で、宮中心部を南北に縦貫する南北大溝SD一九〇一Aから木簡一点が出土したが、断片であり

釈読できない。

また、飛鳥池遺跡の一九九七年度の調査（飛鳥藤原第八四次調査）でも多数の木簡が出土したが、同遺跡は一九九八年度も継続して調査中であり、また木簡についても現在整理途中であるため、次号に併せて報告の予定である。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「
大和国高市 池田武市〔朗
山中〕」 〔出カ〕 137×70×13 011

厚みのある板材に墨書したもので、四周は原形をとどめているが、墨痕は薄い。荷札であろう。

9 関係文献

奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報一九九八一

II』（一九九八年）

同『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』111（一九九八年）

（寺崎保広）

熊野評は後の丹波国熊野郡で、熊野評の木簡としては二例めにあたる。近代の貢進例は二条大路木簡の志摩国につぐものである。「塙塗」は他の木簡にみえる「塙染」と同義で、保存のために塙をまぶして貢進したものと考えられる。「延喜式」には丹波国の諸国貢進御贊として、「塙塗年魚」がみえる。

ちなみに、「藤原宮木簡」一では「百廿隻」部分だけしか掲載できなかつたが、これは写真撮影以前に盗難にあつたためである。一九九〇年になつて実物の所在が確認され、漸く完形の大贊木簡として日の目を見るに至つたのである。

（寺崎保広）

奈良国立文化財研究所『藤原宮木簡』一の一九二号の上部接続断片が確認され、完形の荷札木簡となることが判明した。

「▽熊野評大贊塙塗近代百廿隻」

243×20×3 033



藤原宮出土の「大贊」木簡

